

## 伝承文化の継承や生涯学習を支える高齢者

### <ポイント>

- ・住民に生涯学習の機会を提供する事業の中で、高齢者が「講師役」を担っている。
- ・高齢者は、住民（婚入してきた主婦層中心）に、はたおりの技術を教えるだけでなく、主婦の先輩としての知恵を伝えたりするなかで、「講師役」に大きなやりがい、生きがいを感じている。
- ・また、「講師役」として生涯学習事業を支えるきっかけになった、居住集落に伝わる伝承芸能の衣装の再現が、高齢者自身のはたおりの技術の再発見につながっていたことも注目される。

### <高齢者がかかわる事業の概要>

群馬県北橋村箱田集落には、獅子舞が伝承されている。100年をこえる時の流れの中で破損した獅子舞の衣装の修復が望まれたが、金銭的な問題や、独特の柄がないなどの理由から、布を織り自前で再現しようということになった。

箱田集落から相談を持ち込まれた同村の教育委員会は、機織りの技術伝承を生涯学習施策の中で進めようとしてたこともあり、機織り機と場所を提供した。機織りの担い手は、同区の高齢者6名。彼女たちは「織り姫」に選ばれ、数十年ぶりの機織りにとまどいながらも（数回の機織りの機会で、教育委員会がまねいた専門家がなくなっただけというが）、必要な布を織り上げたばかりか、教育委員会から提案された布袋（写真）までも制作した。

こうして復活した機織りの技術とそれを駆使する織り姫は、引き続き平成10年度より教育委員会が行っている「はたおり教室」に引き継がれていった。同教室は、月に2度、小学校（2校）の空きスペースで実施されており、20名程度の受講生が、織り姫達を講師役に、機織り機に向かっている。

織り姫たちは、受講者にアドバイスを送ったり、機織り機にかけた糸が切れた時にそれを結ぶなど、受講者にはできないことを手助けしている。

教育委員会は、運営計画の段階から織り姫達の意見を反映させている。また、その都度の教室の運営も織り姫達にゆだねている。教育委員会は、織り姫達のアドバイスを受け、材料の手配や道具の



修理など裏方として教室を支える役割を果たしている。

教室では、機織りが一段落した時などに、持ち寄った一品を味わいながらお茶のみが楽しまれている。受講生の多くが村外から婚入してきた主婦であるため、「昔のムラの話」や地域で暮らす主婦の先輩の何くれもない経験談などが「面白くて、ためになることを教えてくれる」と好評だ。

また、小学生も時折顔をのぞかせ、機織り機に向かうこともある（写真）。こうした子ども達にも、「どう伝えたらよいのか」と考えながら、織り姫達は、機織りの技術やそれが暮らしを支えていた頃の話の伝えている。

### < 高齢者が担う役割 >

織り姫（高齢者）は、かつて暮らしの必要から身につけたものの「すっかり忘れていた」という機織りの技術を試行錯誤の中で再生し、発揮することで、伝承芸能の継承を支えた。また、その技術は、布袋という村おこし製品を生み出した。

はたおり教室は、「生涯学習としては一番成功した例だ」と評価されるほどの人気だが、これもまた、織り姫達の技術なくして成立し得なかったことは言うまでもない。

機織り教室を支えているのは、技術だけではない。お茶のみの中で語られる「織り姫」達の話に込められた、北橘村という地域で暮らしを営んできた経験もまた、生涯学習施策を支えている。

### < 獲得される生きがい >

ここでは、織り姫（高齢者）達の言葉を通して、どのように生きがいが獲得されているのかに触れてみたい。

獅子舞の衣装再現の担い手に選ばれた時には、「夜も眠れなかった」と織り姫達は口をそろえる。「今頃こんなことをするなんて夢にも思わなかった」という織り姫達だったが、「やってみたら身体が勝手に動いて、すぐにトントンカラリと良い音がでるようになったという。

想定したよりも早く織り



上げられた布を手縫いで仕立てた獅子舞の衣装は、次春の祭りに披露され、織り姫達も招待された。また教育委員会から依頼され、「不満な点があって全部作り直したり」と試行錯誤を繰り返して、自分たちの知恵と技術で完成させた布袋は東京でお披露目された。

こうした過程を振り返って、織り姫達は「もういらない」と思っていた自分たちの知恵や技が活かされることを実感していったという。引き続いて担い手を託されたはたおり教室を、当初は「ウソーなんて言ってたんだけど引き受けた」のは、「やれるかもしれない」という思いが「少しはあった」からだという織り姫もいる。

「やりはじめたらみんな熱があがっちゃって」というのはたおり教室の講師役も、1年という当初の約束もあり、2年目には「くたびれちゃったからやめさせてくれ」と教育委員会に何度も申し入れたという。それでも引き続き講師役を担っているのは、「先生達やめないうで」という受講者の声に後押しされてのことだった。「みんなが喜んでくれると思うと、うれしくて来年もお世話になりましょう」となってしまうと織り姫達は笑う。また、時折顔をのぞかせる小学生が「目を輝かしてやってもいい」と機織り機に向かう姿もやりがいをもたらしている。

織り姫のまとめ役を担う和枝さんは、どう伝えたらよいのか、何が喜ばれるのかを考える「私たちにとっての生涯学習」と、子ども達や若い主婦達と交流の時を過ごすはたおり教室を振り返る。

### < 生きがいの獲得を支える仕組み >

最後に、織り姫（高齢者）達が、上記したような生きがいを獲得することを支えている仕組みについてまとめてみたい。

- ・獅子舞の衣装再現の際には、集落のキーマン達が、春祭りで地域に成果（織り上げられた衣装）を披露すると共に、祭事の飲食（直会）に招待するなど、織り姫達が自分たちの知恵や技を発揮した成果が地域で活かされている（感謝されている）ことを実感する機会を設けていた。
- ・布袋づくりでは、教育委員会が村おこし製品として東京でお披露目することで、織り姫達が、自分たちの技術が地域おこしにつながっていったことを実感できるような手だてを施していた。
- ・はたおり教室では、その年度の運営計画の段階から織り姫達の意見を反映させたり、その都度の教室の運営を織り姫に任せるなどの姿勢をとることで、織り姫達の主体性を引き出していき、そのことを通した生きがいの獲得を後押ししていた。